

氏名	森下 絵里奈
ヨミガナ	モリシタ エリナ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第619号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ひっくり返しの創作論－“Gaze”から反転する“Vision”に向けて－ 〈作品〉 「点線のパノラマ」 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	保科 豊巳
(論文第1副査)	美術家		()	森 弘治
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	齋藤 芽生
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	小山 穂太郎
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	三井田 盛一郎
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

私は毎日を過ごしていると、ちょっと“変だな”と思うことに会うことがある。それは注意していなければ、通り過ぎてしまうような些細な出来事である。例えば、雨が降ると水たまりができるとか、木から葉が落ちる時には葉の影ができていたりとか、ありふれていて普通のことのように思えることである。しかしそれは、見かけほどありふれてはいないと思うのである。目の前の水たまりは、雨や雲や海、そして生き物を介して地球上を循環する水、昨日まで地球の裏側にあった水でできているかもしれない、影は地球から約1500万km離れた太陽から届いた光が、小さな葉に遮られてできたものである。だが同時に私は、水たまりや影が、背後に壮大な物語を隠していなくてもいい。矛盾しているかもしれないが、背景が壮大だから変なのではない。“変だな”と感ずることは、私の経験と見たものとの間のずれにある。こう思っていたが違ったというささやかな驚きが、私のものの見方を揺さぶり新たな視点をもたらすのである。

私たちは何かを見るとき、例えばただのボールにしても、そこに意味や名前、概念や象徴、手触り、ボールで遊んだ記憶などを、何重にも重ねて見ている。そうしてこれがボールなのだと思っている。何かを見て、それが何であるか理解するという行為は個人的な行為であると共に、社会的な合意に基づいた行為である。ものを見て“何かだ”と思う過程に、知らず知らずのうちに歴史や記憶に規定されたフレームが隠れているのである。その隙間にふと気づく、その体験を表現するのが私の作品制作である。私が作るものは、探せないものを探す地図、元のものから離れていくような修復、設計したものにならない設計図、見なかったことをやり直すための本、といった道理に合わないものばかりである。ふとした気づきで起きた心の揺らぎの正体、当たり前を当たり前に見つけないことを見つけたすためには、感覚を“ひっくり返し”凝視するのである。

本論では、個人の経験や想像から作られる知覚世界を“Vision”と呼び、個人の“Vision”の集積であり、個人の“Vision”を規定されたフレームに形作る社会的な合意を、大きな“Vision”と呼ぶ。そしてその隙間に気づき、凝視することを“Gaze”と呼ぶ。本論文は“Gaze”から“Vision”を少しだけ反転させる、“ひっくり返し”の創作論である。

本論文は以下の 4 章から成る。

第 1 章「心が映し出す世界」では、第 1 節「宇宙像」第 2 節「創造神話」第 3 節「お金の銀行」で、“Vision”とは何か、大きな“Vision”がどのように作られ、人間世界を構築してきたかを述べる。

第 2 章「世界を信じさせるもの：“Vision”の解剖」では、第 1 節「フィクション」第 2 節「記憶」第 3 節「物語を生む力、心の自由」第 4 節「信用」で、“Vision”がどのような人間の能力から作られるのかを考察する。

第 3 章「ひっくり返る世界」では、第 1 節「アントロポセン：人新世」第 2 節「反転した影」第 3 節「シードバンク」第 4 節「人工知能とバイオテクノロジー」で、現実世界で起こる“Vision”の“ひっくり返し”の例から、“Gaze”について考察する。

第 4 章「“ひっくり返し”の創作」では、これまでの自身の制作から、“ひっくり返し”について述べる。第 1 節「なんだかよくわからないものに触れる方法」では、私の“身の回り”と“日常”の“ありふれた生活”を見る目が、日用品を“切る”“貼る”といった加工によって変化する。工作的な制作スタイルで“わかったつもりなもの”を“なんだかよくわからないもの”に作り変える“ひっくり返し”を、自身の作品例から解説する。第 2 節「触れるものは、有るものか」では、工作的な制作をしていく中で芽生えた“作る”ことへの懐疑から、自身の体こそ私が“作れる”ものだと考え、自身の身体性を捉える制作を試みる。身体は何でできているか、感覚とは何かを捉え直していくと、何より身近に見えていた自身の身体が、“なんだかよくわからないもの”になっていった。何かに“触れる”“見える”ということが、そのものが“存在する”ことになるのか、感覚と現実の“わからなさ”について述べる。第 3 節「Gaze」では、身体性から浮かび上がった知覚の不確かさを手掛かりに、時間、宇宙に対する道理に合わない思考から表出する、ささやかながら反転が困難な“Vision”を“Gaze”から反転させる試みについて述べる。現実世界とより深く関わるために、信じられる確かなものがないという視点から、“ひっくり返し”の創作について述べる。

結論では、今後の課題と展望を示し、終わらない“ひっくり返し”について論述する。

Gaze:凝視すること、眼差し

Vision:視力、視覚、視界、洞察力、未来像、頭に描く幻、宗教的な幻影

(論文審査結果の要旨)

本論文は、筆者森下絵里奈のユニークで且つ独創的な創作理論を論述したものである。筆者は、論文の中で日常にあるものや日々の些細な出来事がなぜその様な状態にあるのか洞察することから始まり、見ることへの探究に移り、根源的な問いとして「ものがそのものである」と言うことが何であるかを文化人類学、認知考古学、人工知能、バイオテクノロジー、詩、映画、歴史的事象などの側面から横断的にリサーチして、独自論を展開している。本論文で「見ることの経験」が、個人の経験と内在化された社会的フレームワークによる見方が幾重にも重なり合った末に作り出されていると説明している。言うなれば、個人的な行為と共に社会的な合意に基づいた行為（フレーム）によって作り出された、visionの重なりであると捉えている。その先に、筆者はこのvisionと現実世界との間には隙間というものが存在し、その隙間をgaze（凝視）していくと述べている。gaze（凝視）することで、隙間にある種のズレが生じることに気づき、visionを反転する試みを作品制作として実践している。この一連のプロセスが、著者が言う「ひっくり返しの創作論」である。

本論文では、最初の 1～3 章で筆者のvisionの考察及び解剖と分析を通して、広い視野を持ったvisionの捉え方を批評性をもって論じ、第 4 章では個人の体験を交えながら作品制作の実践を記している。まず、第 1 章「心が映し出す世界」では、人々が映し出す世界はどの様なvisionとして存在していたのかを「宇宙像」、「創造神話」、「信用で成り立つ銀行」のカテゴリーに分けて、筆者の考察を交えて検証している。第 2 章「世界を信じさせるもの」では、visionを作り出す人間の心の動きを、根源から読み解き解説を試みている。

第3章「ひっくり返る世界」では、世界で実際に起きた大きなvisionのひっくり返しについて、「アントロポセン」、「反転した影」、「シードバンク」、「人工知能とバイオテクノロジー」の事例を挙げて説明をしている。第4章「ひっくり返しの創作」では、筆者の学部時代からの創作活動を3つの段階に分け、制作を通して試みた「ひっくり返しの創作論」の変遷及び作品を解説している。

筆者の特徴を述べると、身近にあるものを使用して美的あるいは造形的な処理をして表現する芸術作品は他にも多く見受けられるが、そこに裏づけとして先に述べた分野を横断的に用いて理論的な分析を十分に行い、背景を広い視点で繰り広げているところが、他の芸術家と異なり評価できる場所である。このひっくり返しの創作論は、ユニークで独自の理論であることに無限の可能性を秘めている。

最後に、筆者がアカデミックな環境に長く滞在したことにより、芸術家としての作品制作と発表する実践が足りない。そのため、論文の第1～3章で述べている独自の手法による分析や批評が作品にまだ強く反映されていないと言及しておきたい。今後、実世界に出て、芸術家としての活動と作品制作の実践を通して「ひっくり返しの創作論」を展開することで、強固で独自の理論を築いていくことが望まれる。本論文は、学術的な論文ではないものの、作品制作の実践と理論の構築を必要とする学位において、全体的に一貫して明確に論述を読み解くことが出来る内容になっている。学位論文にふさわしい優れた内容として、審査会からも高い評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

身体が認識を自らに叩き込んでいくプロセスを通してモノの記号性は意味をなすのだが、身体が認識を叩き込んでいない場合のモノとの出会いは、解釈不能の身体的体験である。たとえ小さな経験であってもそれがもたらすものは鮮烈だ。既知の常識で何かを認識するのではなく、身体を使って認識をその都度計り直さざるを得なくなる。おそらく森下絵理奈はこのようなところに芸術の本質を見ようとしている。

「飴を溶かす私の体温」「壁紙にエンボッシングをする私と地球との引力」「ビニール樹脂の泡に留められる私の排泄物=吐息」という構造の、人工物に対してのダイレクトな身体の痕跡を再確認することを通して森下は、【水たまりを探しに行く】(2015)、【影の本】(2016)に至って、現象の外側に立つ定点観測の計測者としての要素を強める。ここでは計測者のイレギュラーな不在や観測点のズレ要素が加味され、ドローイングなどを駆使することでより不確定な認識の揺らぎを捉えるような作品にシフトしている。

提出作品【君の光、私の影】(2017)。星空を見ていると逆に天に落ちそうだ…という感覚体験から発想を得た、「タイルの上に散らばる星を見下ろす」作品。様々な宇宙画像写真に写った星の部分だけを丹念に穴あけパンチで切り抜いて星を作る、気の遠くなるような連続的行為がそこに介在する。

【点線のパノラマ】(2019)。大きな鏡面に無数の雨滴のようなものがおびただしく付着している。これは透明なレジンで作られた滴だが、その滴の中に本人撮影の小さな風景写真が仕込まれている。また写真が仕込まれていない滴の中には「鏡により反射され、なおかつ滴により光を屈曲され上下反転した現実世界」の風景を覗き込むことができる。自然の現象と人間の知覚の誤差や混乱を複層構造にして考えられた、非常に複雑な作品である。

このように提出作品群は、記憶や認識のズレに対する森下の意思表示のようなものを行為に「象徴的」に託す(星を延々とくり抜く、記憶の断片の混沌した様を無数の写真の断片によってなぞらせる、等)作品にシフトしてきているようである。

博士在籍中の作品【水たまり】や【影の本】の頃から、自身の手わざや連続的行為の揺らぎがより強調されてきている部分は、魅力を増している。ただ説明もなしに作品だけを見た場合の印象は、このような複雑な思念や発想がそこに隠されていると思えないシンプルな造形になってしまっている面もある。また展示場所に制限があったのか、作品のごく近くに美術館備え付けの仕切りポールを置いたまま展示しており、どこまでが作品なのか不明だったことが残念である。

「作りながら探る行為」の時間に没入しそこで何かが完結してしまうような傾向があるが、作品はそれが展開される時空間において新たに意味を繰り広げるものでもある、と自覚することも必要ではないのか。森下の持つオリジナリティー溢れる感受性は一貫して高い評価に値するが、展示の方法と外部への発信の方法

を含めた、より広義の「表現」を工夫することが、今後の課題として指導された。総合的には優秀な作品群であると認められ、合格の判定とした。

(総合審査結果の要旨)

森下の作品は心と記憶、時間と物質、現実と確証、など作者の触覚を頼りにして知覚的な表現として制作されて来た。

日常の現実への認識のパターンを懐疑し、論文中では「作られたビジョンの中でもう一度ビジョンを作ること」が絵画であると問題提起している。作者は体験や現実に見えない記憶の集積を注意深く探って自己の現実存在と認識の規範との隙間に触れる。作品は繊細な物質に問いかけるような行為によって形付けられた作品として表現されている。

2010年に製作された「この中の云々」では知覚する行為の尺度として体温を頼りに飴を体温で溶かす作品を制作。2015年制作の「水たまりを探しに行く」と題された作品は雨の後の水たまりを座標と日付を手掛かりに水たまりの地図を製作する、一瞬現れる水面を地図の形で留め展示会場に再構築するインスタレーション作品である。ここに生きているという本人が世界に触れる感触を見事に表現として結晶化させて繊細で美しい秀作である。提出作品の「点線のパノラマ」は通学途中のバスのガラスに付いた雫に映る景色から発想している。この雨つぶに映る風景の記憶の集積を鏡に閉じ込めるといった現実と記憶の断面の不思議な作品は展示表現の技術にはまだ進化や展開が必要であるとしても絵画表現の持っているイメージと表現のメディアムとしての物質の中性化には成功した優れた作品であり、提出作品を、審査員全員で博士学位に相応しい作品であると判断した。

「論文はまだ見えない人間の現実を把握するためのシステムを知覚や触覚による方法論によって再構築しようとした自作の作品制作論文である。

論文中では「作られたビジョンの中でもう一度ビジョンを作ること」が絵画であると問題提起している。古代の人間の宇宙や世界像に対するビジョンにおける図像は現代の科学ではまるで子供のような稚拙な像に見える、しかし、この決めつけについても疑問を投げかける。絶えず人間の組織化されて行く認識過程に新たな視線を感得させようとするため、論文ではこの認識検証を人間の歴史過程において描きこまれた図像の歴史を検証し、現実世界と人間の体験に基づいた記憶の組織化のズレと本人の身体感覚の検証していく。

「アントロポセン」、「現実世界と心の世界のズレ」、「現実とは何か?」、「銀行と信用」、と社会学、科学やIT,等の様々な分野の事象を例にして現実とのズレについて指摘し論述している。人間に関するあらゆる分野に対し世界を拡張し他分野を結びつけて検証する過程は、本人の芸術家としての広い意識を感じ取ることのできる優れた論文である。

最後に自作を分析して作品制作の新しい手法を述べている。審査結果は、製作者としての独創的な論文であるとし、審査員全員が博士学位に相当する論文と作品であることを承認した。